

## ミヒャエル・エンデ「モモ」

### — 児童文学にあらわれた内的時間について —

中 村 ち よ

「時間泥棒と、盗まれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子について」の風変わりなお話」という副題のついた「モモ」というこの物語は、現代西ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデの作品(1973)で、エ

ンデはこの作品で一九七四年のドイツ児童文学賞を受賞している。エンデは先に一九六一年にも「ジム・クノップと機関士ルーカス」<sup>(2)</sup>でドイツ児童文学賞を受賞しており、この二つの作品は共にドイツ国内で非常に人気があるばかりでなく、十か国以上の言葉に翻訳され、世界的にも広く知られるに至っている。特に「モモ」はその内容から、読者層は子供のみならず、青年から大人に至るまでの広い年齢層にわたっている。時間というこの捉え難い不思議な概念をめぐるエンデのファンタジー、この作品の中に微かに響いている遠い星々の世界からのひそやかな楽の

音、モモという女の子の不思議な力等々、この作品には年齢を問わず、或は年齢に従って、読む人の心を捉え、時間についての想いへと誘うものがある。

エンデはこの作品で、現代の効率至上主義の社会に対して、真に人間の生きる時間とは?という問いかけをしているのであるが、このテーマを時間泥棒とモモという女の子を軸にして、多分に探偵小説的なスリルと、ドイツロマン派の童話を想起させるような寓意性のあるファンタジーとに満ちた、極めて魅力的な現代の童話の形に表現している。

現代の、特に一九七〇年代のドイツ児童文学の分野においては、社会化という問題が殊更意識され、子供達には、楽しいファンタジーの世界に遊ばせる夢物語よりも、子供が現実の社会で直面する問題に適応でき

るよう、さまざまな社会的テーマを扱った作品をこそ与えるべきである、という考えが主流を占めていた。<sup>(3)</sup>このような時代の流れの中にあって、子供のための文学の真の魅力をもつ作品として、エンデの「モモ」は、プロイスラーの「クラブバート」と共に光を放っているように思われる。<sup>(4)</sup>

## 一

この物語は、一般にファンタジーと呼ばれるジャンルに属している。作品の舞台となっているのは現代の、或るかなり大きな都会である。この都会は、町はずれの松<sup>ビニエ</sup>の木の中に古代の円形劇場の廃墟をひっそりと残していることから、南フランスかイタリアの都会のイメージを漂わせている以外は、何一つ特徴を持たない、いわば、類型的都会とでも言い得るものである。そして、この類型的都会に住む人々も、我々の身の周りに極く普通に見られる子供達であり、一般的現代人である。

この都会の中で何時の間にか時間泥棒である無気味な灰色の男たちが暗躍をはじめ、人々から次第に時間を奪い取って行く。時間を無駄にしないで時間銀行に貯蓄すれば二倍になって戻って来るといふ巧みな言葉に操られて、将来のよい暮らしのためと信じて人々は一生懸命時間を節約し、その結果、時間に追い立てられるように忙しい生活を送るようになる。子供たちも「将来の役に立つ」勉強をしなければならない。ただ楽しく遊ぶことは時間の無駄なのである。こうして社会の営みは非常に効

率化される一方、人間から真に生きる時間が奪われ、忙しさに追われる人々の心の中は、貧しく、とげとげしくなり、次第に荒廃して行く。「人間が時間を節約すればする程、生活は痩せ細ってしまう」のである。

モモはこのように時間を奪われた人々に、本当の意味での生きる時間を取り戻すために灰色の男たちに立ち向うのであるが、その前に、宇宙全体の時間を司るマイスター・ホラのもとへ行って、時間の意味を教えられる。又、時間の源まで導かれて、一つ一つの花が他のどの花よりも美しく咲いては消えて行く時間の花を見て、一人一人の人間に与えられる時間の豊かさ、美しさに深く感動する。この神秘に満ちた時間の源へは、<sup>ネバーランド</sup> <sup>ニーマル・ガッセ</sup> Niemals-Gasse (Never Alley) を通って行くのであるが、日常の世界とは次元を異にする、いわば、四次元の世界への通路のようなこの道は、この都会の或る地点から密かに通じていて、それを知っているのはマイスター・ホラの使者カシオパイアだけである。つまり、現実の日常の生活の中にファンタジーの世界をひそませて、その両者を巧みに結びつけ、交錯させるという手法がとられており、モモと灰色の男たちの間のスリルに満ちた戦いも、この二つの領域にわたって展開されることになるのである。

現実の世界の中にファンタジーの世界をひそませ、その二つの世界の交錯という形で作品を構成する手法は、イギリスの児童文学の作品によく見られるが、このような作品がイギリス児童文学のお家芸かという

と、そうはいきれないのであって、少し時代を遡れば、ドイツ・ロマン派がこのジャンルで優れた作品を生み出し、むしろ、ドイツ・ロマン派がこの種の作品の源であるとさへ考えられる。しかし、この点については今はさて置き、ここでは、この作品のテーマである時間の問題と、この問題をめぐるエンデのファンタジーに焦点を当てて考えてみたい。

## 二

まず、エンデの「モモ」以前に、時間をテーマにした児童文学としてどのような作品があるかということであるが、時代的に近いものとしては、イギリスの作家フィリップ・ピアスの「トムは真夜中の庭で」<sup>(5)</sup>(1958)がある。これは、彼自身作家でもあり、又、児童文学についての優れた批評家でもあるJ・R・タウンゼンドが、第二次世界大戦以降のイギリス児童文学最大の傑作としてあげている作品である。<sup>(6)</sup>時代を少し遡れば、イギリスには、いわゆるタイム・ファンタジーと呼ばれる一連の作品<sup>(7)</sup>があるが、これらの作品の多くは、現在と過去という二つの時間の間を主人公たちに往復させて、そこに生ずるいろいろな事件の面白さを物語りの骨子としている。これに対して、ピアスの作品は時間そのものが作品のテーマであり、又、時間もより内的なものとして捉えられている。ピアスは主人公トムに、日常生活を流れる通常の意味での時間と、たまたま彼が真夜中の庭に見出した不思議な世界を流れる時間を対比して考えさせ、時間とは何かの問題に迫らせる。

真夜中に十三時という、有り得ない時を打つ大時計は、日常の世界と夜の庭の世界との両方の時を刻んでいる。この時計に興味を持ったトムは、時計の文字盤の絵に書き込まれている「もう時がない」というヨハネ黙示録の言葉から、世界の終りに最後のラッパが吹き鳴らされた時、世界中の全ての時計が時を打つのを止めて、時が永久に止ってしまったことを想像する。時間というものは有限のもの、「かりそめの、一時的なもの」なのだろうか？もしそうだとすると、そして又、「人間はそれぞれ別の時間をもっていて、誰の時間もみな、同じ大きな時間の中の小さな部分である」と考えるならば、「自分の時間から抜け出して、ほかの人の時間の中へ入って行く」ことが出来ても不思議はない。真夜中の庭の世界を流れている過去の時間―それは、その世界に住むハティという少女の現在の時間であるが―に、自分がこれからずっと住むことが出来るかも知れない、とトムは考える。

トムは、又、或る夜、どんなに長い間庭で遊んでいても、大時計以外の時計は殆んど時を刻んでいないことに気付く。真夜中の庭を支配している時間は、日常の時間の中にはない、「普通の時間の法則には縛られない、限りのない時間」なのではないか？トムは自分の時間を、庭の中でハティと何時までも遊んでいられる時間―つまり「永遠」と取りかえたいと思う。過ぎ去って行く「時間」を、通常の時間の支配の外にあるハティの子供時代の「永遠」と取り換えたい――これは、大人の制約を受

ける現実の生活から逃れて自由な世界を追い求める子供の永遠の願いであろうが、同時にそこには作者ピアスの、去り行く子供時代に対する限らない愛惜の気持ちがこめられているように思われる。時間を知らない、永遠の光に照らされた子供時代を、ピアスは、トムとハティの遊ぶ庭の世界に感覚的に、リアルに描き出している。

しかし、その世界にも終りが来る。物語の経過と共に、何時の間にかハティの時間の方がトムを追い越して、ハティはトムの遊び相手から、すっかり大人になった女の人になってしまう。真夜中の庭に出現する世界を流れている時間は、実はその庭が所属する館の三階に住むバーソロミュー夫人の回想の中の時間であることが、作品の最後の章で明らかとなる。トムは毎夜、年老いたバーソロミュー夫人が夢みる彼女の少女時代の思い出の中に入っているのである。ハティは少女だった時のバーソロミュー夫人であった。バーソロミュー夫人は現実の少年トムに逢って、夢の中で逢っていた少年がトムであったことに気付く。トムもバーソロミュー夫人の中にハティを認めて、二人はかく抱き合う。

ピアスはこの作品について、「想像力を以てしても、理性を以てしても、最も信じ難いことの一つは、時が人々の上にもたらす変化である。子供たちは、何時かは自分たちも大人になるとか、大人たちもかつては子供だったということを聞くと、声をあげて笑う。私はこの理解不能のことを、トム・ロングとハティ・メルバンの物語の中で探究し、解明し

ようと試みた。」<sup>(8)</sup>と述べている。捉え難い時間を、目に見える形に形象化させる—そのために考えられたのが、バーソロミュー夫人の中にハティを認めるという結末であろう。

ここから連想されるのは、プルーストの「失われた時を求めて」の最終章で、最早若くない主人公が、自分のかつての恋人ジルベルトの娘に出逢うパッセージである。小説の冒頭ではまだ若かった人々も、このゲルマント公爵邸での会に集った時には、その間に流れ去った歳月が否みようもない跡をとどめていた。その中で、十六才の美しい少女に成長したサン・ルー嬢は主人公を感嘆させる。

無色で捉え難い時は、いわば、私がその時を目に見、手で触ることができるよう、少女の姿に肉体化したのだった。……

美しい人だと私は思った。まだ数々の希望に満ち、笑みをたたえているこの少女は、私が失ってしまった歳月そのものから形造られていた——彼女は私の青春の似姿であった。<sup>(9)</sup>

プルーストのように、書くことによって時間を構築すること、プルーストの言葉によれば、人生を一つの書物の中で現実化することは、<sup>(10)</sup>ピアスの作品の目的では勿論ないが、時間が空間の相を帯びるという点で両者は非常に近いということが出来る。

又、同様に、ピアスの作品の「匂いが鼻孔に感じられる位リアルに」<sup>(11)</sup>再現されている庭―この一人の人間の回想の中に甦った過去が、「時」の支配から脱して「永遠」の中に位置づけられている世界からは、例えば、メゼグリーズの方への散歩を書き綴るブルーストの文章から浮び上る世界と共通するものが感じられる。リラの花を描くとき、又、ヴィヴオーヌ川沿いに歩きながら、まわりの自然を、睡蓮の花を描くとき、ブルーストは対象が与える印象を微妙なニュアンスに至るまで識別し、それを感覚的に描き出すことによって、そこに対象が実存する「超時間の場」<sup>(12)</sup>を出現させている。

意識の流れとか、心理的時間という言葉に代表されるように、二十世紀、特にその初頭の三十年間のヨーロッパ文学最大の関心事は、新しい時間処理の問題であった。心理的時間の問題は、歴史的に見ればゲーテのファウスト第二部まで遡り得るテーマであるが、二十世紀文学において特徴的なことは、散文が質的に変化し、自己の実存の証しとしての散文が書かれるようになったことに、この心理的時間の問題が深くかかわっている点である。存在の不安におびやかされつつ、その中において如何にして自己の実存を確立するかという試みが、必然的に自己の内部へ、意識の内側へ、主観的時間の世界へと導いたのである。ピアスは、この二十世紀的な意味での時間のテーマを子供の文学の中に取り込んだ最初の人ではないかと思われる。そして、ファンタジーの世界の中に、現

実の世界を流れる時間の働きと、人間の心の中の時間をテーマにした、知的構成とみずみずしい情感を合わせ持つ、独創的で魅力ある作品を創り出した。そして又、ピアスがこの時間のテーマを展開させる場として、自分の子供時代の庭の思い出の全てを投じて描き出したこの真夜中の庭は、ピーター・パンの夜のケンジントン公園と同様に、現実の世界の下に隠されている神秘の世界であり、その神秘の中にきらめいているのは、イノセントな子供時代というイギリス児童文学に極めて特徴的な世界であることは、児童文学に現われるお国ぶりという点で興味深い。

### 三

同じ「時間」をテーマにした作品であるが、エンデの「モモ」は、時間に対してピアスの作品とは、また異ったアプローチをしている。時計が刻む物理的時間に対して、ピアスは回想の中を流れる内的時間を神秘の世界の中に具象的に示し、そこに物語としての興味の中心を置いた。エンデが物理的時間に対比させているのは、「人が心で感じとる時間」である。「心が感じとらないような時間は、失なわれたも同じなのだ」という言葉からも分るように、エンデは物理的時間の流れにさらされている人間にとつての内的時間、或は、もっと適確に言えば主体的時間の問題を取り上げている。広い意味では、この作品も又、二十世紀的な意味での時間の問題にかかわっているのである。ただ、エンデの場合、時間というテーマは、社会に対する個人のあり方の問題を基盤に据えて捉えら

れている。

二十世紀文学において、例えばカフカにせよ、リルケにせよ、これ程までに自己の実存が求められたのは、高度に発達し、強固な組織と化した近代社会が、人間を画一化し、個人の生を圧迫しはじめたことがその背景にあったと考えられる。現代のますます巨大化する効率社会の、個人に対する有形・無形の圧迫は、第二次大戦後の経済的繁栄の中で、一層その度合いを強め、子供の生活までおびやかし始める。エンデはこのような社会に生きる子供たちに、時計が刻む物理的時間の他に、心で感じる時間があり、心で感じる時間をもつことが、真に生きることなのだと語るのである。

「光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのと同じように、人間には時間を感じとるために心というものがある。そして心が感じとらないような時間はすべて失われたも同然なのだ。」

スピード優先、効率第一で走り続ける現代の社会が、時計が刻む一時間、或は一分間に吐き出すエネルギーはかつてない程多量であるが、いわば文明の利器によって物質的豊かさを求めて推進されて来た時は金銭の能率至上主義は、果して人間に本当の幸福をもたらしたであろうか。そのために人間は却って何か大切なものを失って来たのではない

か。時間はお金に換算できるものではない。何故ならば、「時間とは生いのちであり、人間の生とはその人の心の中にある」からである。この、心で生きる時間、人間が心で感じとる時間を再び取り戻すことが、この作品のテーマである。

このテーマを物語として展開させるに当って、作者は、モモという不思議な力をもつ女の子を創造する。不思議な力といっても魔法の力ではない。モモに話を聞いてもらっていると、どうしてよいか分らずに思い迷っている人は、急に自分の意志がはっきりして来るような、悩みのある人には希望と明るさが湧いて来るような、失意の底にある人も、自分を取り戻し、自分は自分なりにこの世で生きる価値のある大事な存在なのだと思うようになるような、そんな話の聞き方の出来る子供である。

又、モモは星々の世界から聞えて来る、ひそやかな音楽に聴き入り、動物たちや、雨や、木々にざわめく風にまで耳をじっと傾ける。すると、全てのものがそれぞれの言葉でモモに語りかけて来るのである。歌を忘れたカナリヤがまた楽しそうに歌い始めるまで一週間の間、そばでじっと耳を澄ましていてあげることの出来る子供である。忙しい社会に生きる現代人が殆んど忘れかけていること―自分を取り囲む人々と、自然の動物や植物と、空の星々と、心を共鳴させながら生きて行くことの出来る子供である。

このモモという子供は、両親を含めて身内というものを持たない、年

齢も生まれも分らない、いわば浮浪児という設定になっている。そして或る日、どこからかやって来て、この物語の舞台となるかなり大きな都会の町はずれの、古代円形劇場の廃墟に住み着く。モモと近所の貧しい人々との間に、温かい交流が始まる。話しに来る人に耳を傾け、子供たちと楽しく遊び、人々にとって無くてはならない存在となっていく。

この平和な町に、何時の間にか一つの影が拡がり始める。音もなく、人目につかず攻め入って来る侵略軍、それは全身蜘蛛の糸のような灰色をした服装に身を固め、灰色の葉巻をくゆらし、灰色の書類カバンを持った、顔まで灰そのものの色をした一群の男たちで、彼等はしゃれた自動車に乗って町を走り廻り、あちこちの建物を出入りしては、しきりに小さな手帳に書き込みをする。その数は日に日に多くなって行くが、人々は誰も彼等に気付かない。モモだけは或る夜、廃墟に現われた彼等に気付き、それまで味わったことのないような寒けに襲われる。

これが物語の第二部のタイトルとなっている灰色の男たちである。彼等は人間の時間に対して一つの計画を持ち、その計画を実現するため、人々に気付かれないよう細心の注意を拂いながら慎重に準備をし、チャンスを狙う。彼等の計画とは、人間に無駄な時間をきりつめて、それを時間貯蓄銀行に貯えさせることである。彼等は自分自身の命を持たず、人間たちから集められ、貯えられた時間で生きて行く、いわば影の存在である。実体のない影の存在であるということは、人間にとっての

アルター・エゴであると考えることが出来る。事実、彼等は一人の人間の心に迷いが生じたとき、すかさずその人の前に姿を現わし、交渉を始めるのである。例えば、床屋のフージー氏の場合は、

「おれは人生をあやまった。」とフージー氏は考えました。「おれはなにものになれた？ たかがけちな床屋じゃないか。おれだって、もしもちゃんとしたくらしができてたら、いまとはぜんぜんちがう人間になつてたろうになあ！」

でも、このちゃんとしたくらしというのがどういうものかは、フージー氏にははっきりしていませんでした。なんとなくなりっぱさうな生活、ぜいたくな生活、たとえば週刊誌にのっているようなしゃれた生活、そういうものをばくぜんと思いついていたにすぎません。

「だがな、」と、フージー氏はゆううつな気持ちで考えました。「そんなくらしをするには、おれの仕事じゃ時間のゆとりがなさすぎる。ちゃんとしたくらしは、ひまのある人間じゃなきゃできないんだ。ところがおれときたら、一生のあいだ、はさみとおしゃべりとせっけんの泡にしばられっぱなしだ。」（大島かおり訳）

フージー氏がこう思った丁度その時、しゃれた型の灰色の自動車が走って来て、店の前で止り、灰色づくめの紳士が降りて来て、「わたしは時間

貯蓄銀行から来た、ナンバーX Y Q / 3 8 4 / b という者です。あなたはわたくしどもの銀行に口座を開きたいとお考えですね？」と切り出すのである。

「……もしもちゃんとしたくらしをしていたら、あなたはいまとはぜんぜんちがう人間になっていたでしょうにね。ようするに、フージーさん、あなたが必要としているのは、時間だ。そうでしょう？」

……

「でも時間はどこから手に入れます？ 倅約するしかないんですよ。

あなたはまったく無責任にじぶんの時間をむだづかいしています。おわかりいただけるように、ちょっと計算してみましかうか。一分は六十秒です。一時間は六十分。この計算についてこられますか？」

……

「六十かける六十で三千六百。つまり一時間は三千六百秒です。

一日は二十四時間。三千六百の二十四倍で、一日は八万六千四百秒。一年はごぞんじのとおり三百六十五日。そうしますと、一年はぜんぶで三千百五十三万六千秒になります。……」 (大島かおり訳)

この様に計算を続け、フージー氏が七十才まで生きると仮定して、二十二億七百五十二万秒がフージー氏手持ちの財産であると灰色の紳士は強

調し、次に、四十二才のフージー氏が今までに費して来た時間を書き上げ始める。

あなたの一晚の睡眠時間は？ 三度の食事に使う時間は？ 一日の仕事の時間は？ 耳の聞えないお母さんを相手におしゃべりする、この無駄に捨てられた時間が日に一時間。余計なインコを飼っていて、その世話に使う時間が十五分。お母さんが体が不自由だから家事もいろいろ自分でしなければならぬ、その時間が一時間。映画に行ったり、合唱団で歌ったり、飲み屋へ行ったり、友達に会ったり、時には本さえ読んだりして、要するに役にも立たぬことに浪費する時間が平均すると一日に三時間。おまけに、あなたの生活の特に大事な部分、あなたが秘密にしているあのダリアさん、あなたはダリアさんと結婚するつもりですか？——いいえ、それは無理です……——そうでしょう、なにしろダリア嬢は足が悪くて、一生の間車椅子から離れられないのですから。それにも拘らず、あなたは毎日花をもって彼女を訪ねるのに半時間も使っている、何故です？——だって彼女はとても喜びますから……——しかし、冷静に考えれば、あなたにとってそれは無駄に失われた時間で、合計すれば何と二千七百五十九万四千秒もの損失になります。おまけに、あなたには毎晩寝る前に窓のところに座って一日のことを思い返す習慣があつて、これが又、千三百四十九万七千秒のマイナス……

これら全ての合計十三億二千四百五十一万二千秒をフージー氏が今ま



でに浪費してしまった時間として数え上げ、それをフージー氏が今まで過した四十二年間から差引いて残高が出るかどうかを見るのであるが、この計算の立て方そのものは間違っているにも拘らず、計算上の数はびったり合って差引きゼロとなるため、フージー氏はこの数の魔力に圧倒されて、全て相手の言う通りだと認める気になってしまふのである。これを突破口にして、灰色の紳士は、時間を俟約して貯蓄させるための詭弁を更に展開して行く。

「こんな調子でやっていってはいけないと思いませんか？……たとえば、もしも二十年まえに一日わずか一時間の俟約をはじめていたら、あなたは時間銀行にいまでは二千六百二十八万秒の額をあずけるご身分になってたはずですよ。一日二時間の俟約なら、もちろんその二倍で、五千二百五十六万秒になってたでしょう。どうです。フージーさん、これ程の額とくらべれば、たかが二時間くらいは何ですか？……それでも、これからさきの二十年も、あなたがおなじように一日二時間の俟約をなさったとすると、なんと一億五百十二万秒というすばらしい額になる計算です。そうすると、あなたは六十二才にたったあかつきには、この大資本が自由に使えるわけです。」

(大島かおり訳)

灰色の紳士は、更に、時間貯蓄銀行は、預った時間に利子も拂うと説明する。フージー氏はこれを素晴らしい話だと思い、これからでも時間が俟約できるなら俟約して貯め込もうと思う。でもどうやって？

「時間の俟約のしかたくらい、おわかりでしょうに！たとえばですよ、仕事をさっさとやって、よいいなことはすっかりやめちゃうんですよ。ひとりのお客に一時間もかけないで、十五分ですます。むだなおしゃべりはやめる。年よりのお母さんとすごす時間は半分にする。

いちばんいいのは、安くていい養老院に入れてしまうことですな。そうすれば一日にまる一時間も節約できる。それに、役立たずのボタンインコを飼うのなんか、おやめなさい！ダリア嬢の訪問は、どうしてものというのなら、せめて二週間に一度にすればいい。寝るまえに十五分もその日のことを考えるのもやめる。とりわけ、歌だの本だの、ましていわゆる友だちづきあいだのに、貴重な時間をこんなにかうのはいけませんね。ついでにおすすめておきますが、店の中に正確な大きい時計をかけるといいですよ。それで使用人の仕事ぶりをよく監督するんですな。」

「わかりました。おっしゃったことをぜんぶやってみましょう。でも、そうやってつかいのこした時間―その時間はどうします？ わたしがおたくの銀行にもっていくんですか？銀行はどこです？ それと

も、じぶんでしまっておくんですか？そういうことは、どうなるんです？」

「そのことなら、ご心配は無用です。わたくしどもにおまかせください。あなたの儉約した時間は、一秒のまちがいもなく、ぜんぶわたくしどもの銀行に入ります。あなたの手もとには、すこしものこりません。始めてみれば、すぐおわかりになりますよ。」（大島かおり訳）

こうしてフージー氏と灰色の紳士の間に契約が成立する。このような手口で彼等は何千、何万もの人々と時間貯蓄の契約を取り交すのである。

町でも職場でも到る処「時間は貴重だ―無駄にするな!」、「時は金なり―節約せよ!」の標語が掲げられ、時間を節約することが生活を豊かにすると信じられた。しかし、現実とは全く異なっていた。時間貯蓄家たちは、モモや、モモの友人達より良い服装はしていたが、忙しく、くたびれて、不気嫌で怒りっぽい顔をし、とげとげしい目をしていった。「モモのところへ行ってごらん!」という言葉も知らないし、その人に話を聞いてもらえば、それだけで心がなごみ、気持が晴れ晴れするとうような人は彼等のそばにはいなかった。又、たとえたとしても、彼等がその人のところへ行ったかどうかは疑問であった。余暇の時間さえ無駄には出来ず、その時間内に出来るだけ沢山の娯楽を詰め込もうと、やたら忙しく遊ばずにはられない。

人の心だけでなく、都会の外観までが変化した。家を造るにも、安上りで時間も節約できるように、同じ形の画一的な高層住宅が延々と連なり、そこを、同じ外見の道路が真直に地平線の果てまで続いている。それは、「整然と直線の連なる秩序の砂漠」であって、そこに住む人々の生活もその様に、全て計算され計画され、一センチの無駄も一秒の無駄もなくなってしまった。「時間とは生いぢであり、生とは人間の心の中にあるもの」なので、「人間が時間を節約すればする程、人間の生は瘦せ細って、無くなってしまふ」のである。

この生活の変化にまず気付いたのは子供たちであった。大人たちが節約したつもりの時間は、実際は灰色の男たちに盗まれているのだということを知った子供たちは、人々の注意を喚起するために集会を開こうとするが、灰色の男たちの妨害で不発に終る。次いで灰色の男たちの鋒先きは、自分達の秘密を嗅ぎつけてしまったモモに向けられる。そこからモモと灰色の男たちの戦いが始まるのであるが、その前に、エンデがここで見せた時間貯蓄銀行等のアイデアに関連して、リルケの「マルテの手記」の中のニコライ・クスミツチュの話に言及しておきたい。

#### 四

この、時間についての計算と時間貯蓄銀行のアイデアは、リルケの「マルテの手記」の中のニコライ・クスミツチュ(15)の話を思い起させる。このニコライ・クスミツチュに関するパッセージはいささかアイロニ

カルで、諧謔に富んだ調子で語られている。ニコライ・クスマミツチュは、意識の上で二分されて、時間資本家としてのクスマミツチュが、毛皮の外套も着ないで貧相な姿で馬毛のソファに座っているもう一人の自分、彼のアルター・エゴに話しかけるのである。

「時は貴重なもの」「Zeit ist kosbar.」「時は金なり」「Zeit ist Geld.」という、よく耳にする言葉に誘われて、ニコライ・クスマミツチュは或る時、自分がこれから生きるであろうと思われる五十年を、日に、時間に、分に、最後は秒にくずして、みて、その額の大きさに圧倒される。これ程莫大な時間を所有している人間を、今まで少しも警護して来なかったとは、しかし、間もなく彼は鷹揚な気持になって、幾分恰幅よく見せるために、毛皮の外套を着込み、この夢の様な資本の全てを自分自身に贈り物として与えるのである。

贈り物を貰った方のクスマミツチュは、その莫大な財産を鼻にかけることなく、それ迄の慎み深い、規則正しい生活が続けて行くのであるが、二、三週間たってみると、信じられない程莫大な支出をしていることに気付いて愕然とする。俟約しなければ、と彼は思う。朝は何時もより早く起き、洗面も簡単にすませ、お茶も立ったまま飲んで、事務所に走って行く。彼は到る処で少しづつ時間を節約するが、日曜日になって勘定の整理をしてみると、節約した分など無いのである。彼は欺されたのだと悟る。両替などしてはいけなかった。一年というのは長いけれど、こ

のいまましい小銭 (dieses infame Kleingeld) は、何故かどんどん無くなってしまう。彼は両替を元に戻そうと思う。十年紙幣を四枚と五年紙幣を一枚、残りの小銭はごたごたが起きないように、相手にくれてやる積りでいた。しかし、当の人物は姿を現わさない。多分詐欺がばれて、どこかに閉じ込められているに違いない。あの紳士にこんなひどい目にあわされたのは自分一人ではあるまい。ああいう詐欺師のやることは、何事も大掛りなのだから。クスマミツチュは、又、一種の時間銀行のような国立の機関があって、そこへ行けば、ぼろぼろになった秒の小銭を両替してもらえに違いないと思う。

後になってクスマミツチュは、時間とお金が区別できないかのように混同してしまったのは、その時気が散っていたからだと気付く、気付いたからには、これからは今迄とは違った風に行くだろうと思う。彼にとつて、知らぬ間に秒を刻んで過ぎ去って行くこの時間というものは、厄介なものであった。しかし、それは他の人たちにとっても同様に厄介なものではないだろうかと思うことで、いくらか自分を慰めるのである。

次に続くパッセージで、リルケは、クスマミツチュの内面で通常の意味での時間、空間の秩序が崩れ去り、時間、空間を客観的に固定している点がゆらぎ、風のように通り過ぎる時間にさらされつつ、奇妙に揺れる動きの中で、静かに横になって、内面の世界にいわば何か安定したものを得るために、プーシキンやネクラソフの長い詩を同じ抑揚で、単調

に朗読するクスマITCHUのことを書き記している。このクスマITCHUの姿は、時間、空間の秩序の崩壊を前に、それを克服することが出来ず、お手上げの状態で、詩を読むことによってかろうじてその揺れに耐えているさまを表現したものと考えることが出来る。

リルケの時間概念を知る上で更に興味を惹くのは、マルテの祖父、ブラーエ伯爵について書かれた部分<sup>(16)</sup>である。

時間の継続など、もう祖父にとってはどうでもよかった。死はごくつまらぬ偶然事件でしかなく、それを彼は平気で無視した。一度記憶にとどめた人間は、そのまま実在したのである。そのことは、たとえばその人が死んでしまっても、少しの変化もなかった。その後何年かたつて、祖父が死んだあと、人々は祖父が全く同じ勝手で、未来のことを現在のことのように感じていた話をした。

ここからも分るように、「マルテの手記」の時代のリルケにとって、物理的時間の克服ということが一つの問題であったと見る事が出来る。そして、この問題はブルーストの場合と同様、リルケにとっても「全き実存」の問題と深くかかわっていた。リルケは時間の秩序からも空間の秩序からも独立した世界存在(Das weltliche Dasein)というものを考えているのである。よく引用される一九二四年八月十一日付の手紙<sup>(17)</sup>

の中で、リルケは、我々の意識のピラミッド (Bewußtseinspyramide) の奥底では、我々の通常の意識——それはこのピラミッドの先端の部分を占めているにすぎないものであるが——では「過ぎ去るもの」として体験されるものが、確固たる「存在」となり得るのだという予感を若い頃からずっと持っていた、と述べている。通常の意味での時間、空間の秩序の崩壊を前に、なす術もなく横たわるニコライ・クスマITCHUの姿は、この様なコンテクストにおいて理解されるべきものであろう。

リルケの時間思想について詳述することは避けるが、客観的時間から主観的時間への移行は、リルケの場合にもブルーストやジョイスの場合に劣らず明瞭である。ニコライ・クスマITCHUの話にみられる客観的時間の捉え難さ、空しさについてのアイロニカルでユーモラスな表現は、エンデの作品ではアイロニーが更に強調され、又、アルター・エゴとしてのもう一人の自分は、エンデの作品においては「灰色の男たち」という一つのキャラクターにまで発展し、この作品に探偵小説的面白さを与えるための大きな役割を果たすに至っている。

しかし、同時に「灰色の男たち」は人間にとってのアルター・エゴであるという性格を完全には失っていない。灰色の男たちは「人間の姿をしているだけ」で、人間ではなく、「本当はいない筈のもの」であり、それが存在するようになったのは「彼等が発生するようなチャンスが人間が彼等に与えたため、それに乗じて彼等が生まれて来た」からであ

る。そして、「今や、人間は彼等に人間を支配するチャンスまで与えている。彼等が人間に対する支配権を握るようになるには、それだけで充分なのだ」と、エンデは語っている。つまり「灰色の男たち」は、人間の心に潜む影の存在、うっかりすると彼等のために人間が生命を奪われかねない危険な存在であり、モモはこの「灰色の男たち」から人間を守るために、一人で彼等に敢然と立ち向うのである。

## 五

モモに自分達の秘密、即ち、彼等が「人間から、生きる時間を一時間、一分、一秒とむしり取る」存在であるということを聞かれてしまった灰色の男たちは、大部隊を動員してモモを追跡し始める。その時モモは既に不思議なカメラ、カシオペアの案内で時間の源に向って歩いていった。そして、或るみずばらしい地区の、漆喰もはげ落ちた高層アパートの間を通り抜けて角を曲った途端、不思議な光の射し込む世界に入ったことに気付く。追手はそこにはどうしても入り込むことが出来ない。モモとカシオペアは更に「決してない道 (Niemals-Gasse)」を通して「どこにもない家 (das Nirgend-Haus)」に到着する。そこがマイスター・ゼクンドウス・ミヌティウス・ホラが住む家で、全ての時間の源である。モモはマイスター・ホラからやさしく迎えられる。マイスター・ホラがカシオペアを遣わして、灰色の男たちの追跡からモモを救ったのであった。

ここでモモは、「時間で、一体何なの？」 „Was ist denn die Zeit eigentlich?“ とマイスター・ホラに問いかける。ピアスの作品で、トムがアランおじさんに「時間でどんなものなの？」 „What is Time like?“ 又は、ゲンおばさんに「時間で何？」 „What is Time?“ と聞くのと全く同じ問いである。アランおじさんは、常識的なイギリス人らしく、時間というものはこれまでどのように考えられて来たか、時間についての現代の一番新しい理論はどうなっているかを説明する。トムは失望し、再び一人で自分の考えを紡いで行く。そして、「人間はそれぞれ別々の時間をもっていて、だれの時間もみな同じ大きな時間の中の小さな部分なのだ」という考えに立てば、時間の働きについて自分が抱いていた疑問をうまく説明することが出来るという結論に達する。トムの „What is Time?“ の問いは時間の本質への問いかけではなく、二つの別々の時間の流れがあるとすると、「時間とはどのように働くもの」 „How does Time work?“ と考えられるだろうかという問いなのである。さすが伝統的に経験主義の国である。

これに対してモモの問いは、時間そのものの、時間の本質に向けられた問いである。「私の知りたいのは時間そのもののことなの——時間で、何かに違いないわ。確かに時間というものはあるのですもの。すると一体、本当は何なのかしら？」マイスター・ホラはすぐには答えを与えない。まずモモ自身に考えさせ、答えを見つけさせようとする。

「時間はある―それはいずれにしろたしかだわ。でも、さわることはできない。つかまえられもしない。においみたいなものかな？でも時間で、ちっともとまっていけないで、動いていくものだわ。そうすると、どこからかやってくるにちがいない。風みたいなものかしら？いや、ちがう！そうだ、わかったわ！一種の音楽なのよ―いつでもひびいているから人間がとりたてて聞きもしない音楽なのよ。でもあたしは、しょっちゅう聞いていたような気がするわ、とってもしずかな音楽よ。」

……

「でも、それだけじゃない。あの音楽はとってもおくから聞こえてきたけれど、でもあたしの心の中のふかいところでひびき合ったもの。時間というのも、やっぱりそういうものかもしれない。」

（大島かおり訳）

「水の上を風が吹くと漣が起るように」、人間の心と響き合い、漣を残して過ぎて行くのが時間だとモモは感じている。時間とは心に響くもの、心で感じられるものであり、時計が刻む客観的時間はモモの意識には上って来ない。モモの問いかけに対して、マイスター・ホラは一歩進めて、「時計というものは、人間一人一人の胸の中にあるものを、極め

て不完全な形に真似て作ったものに過ぎないのだ」と説明する。真の時を刻むのは時計ではなく、心なのである。「光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのと同じように、人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、心が感じとらないような時間はすべて失われたも同然なのだ。」それでは、もし私の心臓が何時か鼓動するのをやめてしまったら、時間はどうなってしまうの？その時はお前にとっての時間は終りになる。そして、今生生きて来た人生を全て遡って、かつてお前がそこをくぐって人生にやって来た銀の門を、今度はまた出て行くのだ。―その向うは何なの？そこは、これまで幾度もかすかにお前に聞こえていたあの音楽の出で来るところだ。でも、今度はお前もその音楽に加わるのだ。お前自身が一つの音になるのだよ。二人の話は何時の間にか、人の生と死の問題にまで及んでいる。マイスター・ホラは徐ろにモモを誘い、時間の源まで連れて行く。

ここでモモは、金色の薄明りの中、黒い鏡のような池の水面から星の振子の動きにつれて姿を現わし、花開き、次第に萎れ、散って、再び水底に沈んで行く時間の花の美しさに圧倒される。次々に浮び上り、咲いては消えて行く時間の花は、一つ一つ異った花で、しかも、一つ咲くごとに、これこそ一番美しいと思われるような花であった。<sup>(18)</sup>そして、又、大きな丸天井の中央から差し込む光の柱は、光として目に見えるだけでなく、そこからは音も聞えて来ることにモモは気付く。

はじめそれは、とおくの木のこずえにたわむれる風のざわめきのように聞こえました。けれどもその音はしだいにはげしくなって、滝の音か、岩に打ちよせる波のとどろきに似てきました。

よく聞いているうちに、それは数えきれないほどの種類の音がひびきあっているのだということが、はっきりして来ました。それらはたえずたがいに入りまじりながら新しくひびきをととのえ合い、音を変え、たえまなく新しいハーモニーをつくり出しています。それは音楽のようでいて、しかもまったくべつのものです。そのときとつぜんモモは気がつきました。まえによく、きらめく星空の下でしずけさにじっと耳をかたむけていたとき、はるかかなたからひそやかに聞こえてきた音楽が、これだったのです。

……………

じっと耳をかたむけていると、だんだんはっきり、ひとつひとつの音が聞きわけられるようになってきました。でもそれは人間の声ではなく、金や銀や、その他あらゆる種類の金属がうたっているようなひびきです。するとこんどはすぐそれにつづいて、まったくちがう種類の声、想像もおよばぬとおくから言いあらわしがたい力強さをもってひびいてくる声が、聞こえてきました。それはだんだんはっきりしてきて、やがてことばが聞きとれるようになりました。いちども聞いたことのないふしぎなことばですが、それでもモモにはわかります。そ

ミヒヤエル・エンデ「モモ」

れは、太陽と月とあらゆる惑星と恒星が、じぶんたちそれぞれのほんとうの名前をつけていることばでした。そしてそれらの名前こそ、この八時間の花Vひとつひとつを誕生させ、ふたたび消えさらせるために、星々がなにをやり、どのように力をおよぼし合っているかを知る鍵となっているのです。(大島かおり訳)

ここに描かれている世界はドイツロマン派の童話の世界に極めて近い。例えば、クリングゾールが語る童話の中のアルクトウールの宮殿の広間に流れる音楽の響きに、この星々の響きは何と似通っていることであろう。<sup>(19)</sup>又、宇宙最高の秩序の表現としての太陽や星々の調べは、ゲーテの「ファウスト」においても歌われている。捉え難い神秘の世界を寓意的に、或は象徴的に語ることはドイツ人の特技の一つであるうか。更にまた、「私が行って来たところはどこなの?」と尋ねるモモに、マイスター・ホラが与える答えは、「お前自身の心の中だ」となっている。このようなにみえて来ると、エンデの語る言葉は、子供を対象に語られてはいるが、その意味するところは哲学的で、あたかも、「内部へと神秘に満ちた道は通じている。永遠とその世界、過去と未来は、我々の内部にあるのであって、それ以外のどこでもない。」<sup>(20)</sup>と語る、ノヴァーリスの魔術的観念論(Magischer Idealismus)を聞く思いがする。時間とは?という問いに対する答えの中に、ピアスの作品からは極めてイギリス的

な、エンデの作品からは極めてドイツ的な思考の色合いが感じられるように思う。

人間の時間の大きさ、美しさに深い感銘を受けたモモは、すぐにも友達に話してあげたいと思うが、そのためには、体験したことが心の中で熟して言葉となって出て来るまで待たなければならなかった。モモは深い眠りに落ちる。

## 六

一年間の眠りから覚めたモモは、世の中がすっかり変わっていることに気付く。以前は町はずれに小さな店を借りて近所の人達相手の居酒屋をやっていたニノは、時間貯蓄家になって以来、すっかり変わって、今や「スピード料理、レストラン・ニノ」を経営する忙しい店主である。以前の観光ガイド、ジジは、今や高級住宅地に住む流行作家、ジャーナリズムの寵児であり、三人の女性秘書を抱えて分刻みの生活を送っている。子供達の生活もすっかり変わってしまった。子供達も時間を無駄に出来ない。楽しい遊びはなくなり、全ての事が、将来の役に立つことかどうかを基準に処理される。ここには一つの風刺的現代社会像が描き出されている。

友達もいなくなり、一人ぼっちのモモは、遂に灰色の男たちに包囲される。彼等は「この世界を人間の住む場所もないようにしてしまったのは人間自身だ。今度は我々がこの世界を支配する。」と宣言し、人間の

時間をまとめて全部マイスター・ホラから奪い取るために、「どこにもない家」に行く道筋をモモから聞き出そうとする。断じて教えようというモモと灰色の男たちの間に戦いが始まる。第三部「時間の花」の後半は、モモと灰色の男たちの間に展開されるスリルに満ちた戦いの物語りである。

モモの勇気ある行動によって灰色の男たちは全て消滅し、盗まれていた時間は解放されて、春の嵐のように舞い上り、空を飛び、都会の上に降りそそぎ、本来の居場所である人間の心の中に帰った。人々には急にたっぷり時間があるようになり、大都会には心豊かな生活が再び戻って来たのであった。物語は大空に星のきらめく夜、古代円形劇場の廃墟に立って、星々の声と時間の花にじっと思いをひそめていたモモが、やがて澄み切った声で歌い始めるところで終わっている。

## 七

この円形劇場の廃墟は、モモがはじめてこの物語の舞台に登場した場所である。親もなく、家もなく、たった一人でどこからかやって来てこの廃墟に住みついたモモは、人生の本当の豊かさを、生きることの本当の意味を人々に告げ知らせてくれた。人間が無くしてしまった本当の生の時間を、人間のために再び取り戻してくれたのである。だが、児童文学の主人公としてのモモは、一体何者であろうか？モモと同じような設定のもとに児童文学に登場した人物に、アストリッド・リンドグレン



の長靴下をはいたピッピ<sup>(21)</sup>がいる。ピッピも両親のいない女の子である。着ている服はつんつるてんで、長靴下の一方は黒、もう一方は縞模様で、しかも、靴までがモモの靴のようにぶかぶかで、二艘の船ほども大きい。ピッピは児童文学の世界に登場するや否や、子供たちの間でたちまち人気者になった。彼女はやりたいことが何でも出来る子供、やりたいことしかない子供である。退屈することを知らない、このおてんばの女の子は、子供たちの夢の実現者であった。子供たちの抑圧された心を解放し、癒してくれる存在であった。しかし、それだけではない。彼女には寛大な心が、又、弱い人々に味方し、弱い人々を助けようとする、優しい、良い心が備わっていた。この点では、モモとピッピの特性は重なるが、モモにはピッピのような活潑さは見られない。モモと一緒に遊ぶようになってから、子供たちはそれ迄に楽しく遊べるようになった、退屈するようなことは全くなかった、と述べられている。そして、実際、物語の第三章は、モモと一緒に子供たちが遊んだ暴風雨ごっこの叙述に当てられている。しかし、ここからは生き生きとした子供たちの叫びは感じられない。モモは読者である子供たちの遊び友達というよりは、この世の人々に一つのメッセージを伝えるために遣わされた存在なのである。この点で、モモは、サン・テグジュペリの星の王子さまと<sup>(22)</sup>精神上的の兄妹であるということが出来るであろう。「星の王子さま」も客観的世界に対して、心の世界、人間の内面の世界の意味を浮き彫りに

した作品である。

遙かな星の世界から地球にやって来た王子さまが、喉の渇きをなおす丸薬を売っている商人に出逢って話をする場面がある。一週に一粒その丸薬を飲むと、もうそれ切り何も飲まなくなるといのである。

「なぜ、それ、売っているの？」と、王子さまがいました。

「時間が、えらく儉約になるからだよ。そのみちの人が計算してみただがね、一週間に五十三分、儉約になるといんだ」と、あきんどがいました。

「で、その五十三分って時間、どうするの？」

「したいことするのさ……」

△ばくがもし、五十三分っていう時間、すきに使えるんだったら、どこかの泉のほうへ、ゆっくり歩いてゆくんだがなあ▽と、王子さまは思いました。(内藤濯訳)

丸薬で五十三分儉約するよりも、それだけの時間を使ってどこか泉の方へゆっくり歩いて行くというのは、心が生きていなければ、その時間は失われてしまったと同じと語る「モモ」の世界と同じである。又、「みんなは、特急列車に乗りこむけれど、今ではもう、何を探しているのか分らなくなっている。」という王子さまの言葉は、客観的時間に追われ

て、心で生きる時間を失った人間の姿を語っている。そして、モモには「人間には時間を感じとるために心というものがあって……」と語ってくれたマイスター・ホラがいたように、王子さまにはキツネが、「かんじんなことは目に見えない。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないのだ。」と教えている。このキツネが王子さまに話す話しぶりは実にエスプリに富んでいる。アザールがペローの童話について語りながら、論理性に次いでエスプリをフランス人の特徴として挙げているが、サン・テグジュペリの作品も、人間にとって本質的に大事なことは何かという、この作品の中心的問題を、エスプリ豊かに、そして又、詩情豊かにキツネに語らせている。エンデの「モモ」が中心的テーマを極めて哲学的に扱ったのとよい対照である。

王子さまが別れを告げにやって来た時、このキツネは、「かんじんなことは、目に見えない。……あんたが、あんたのバラの花をとてみたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」(内藤濯訳)と、王子さまに語る。たった一つのバラの花のために、ひまつぶしすること、心をつかうことの意味を、キツネは王子さまに教えるのである。王子さまにはそれがよく理解できる。「地球に住む人たちは、一つの庭に何千ものバラを咲かせたりしているけれど、自分たちが何が欲しいのか分らずにいる。」という言葉は、言葉通りの意味以上に深い真実をついている。心で生きれば「探しているものは、たっ

た一つのバラの花の中にもある」のである。サハラ砂漠の中に不時着して、一刻を争う修理に没頭していた作中の「私」が、王子さまと一緒に砂漠の中に井戸を探しに行くパッセージは非常に美しい。モモが求めている世界も、この星の王子さまの世界である。何かのために「ひまつぶし」すること、即ち、物理的時間を失うことが、逆に生の時間いのちを得ることなのである。人間が(物理的)時間を節約すればする程、人間の生の時間は痩せ細って、無くなってしまう、というエンデの逆説が想い起される。この二つの作品の心は意外に近いようである。

王子さまは「私」に別れを告げて、自分の星に咲いているたった一つのバラの花のために、星に帰って行く。「モモ」の冒頭にエンデが掲げた小さな詩を読むと、「夜になったら、星を眺めておくれよ。……」という別れの言葉を残して、サハラ砂漠から再び自分の星へ帰って行った、モモの兄弟のようなあの王子さまの星を歌っているように思われてくる。

やみにきらめくおまえの光、

どこからくるのか、わたしは知らない。

ちかいとも見え、とおいとも見える、

おまえの名をわたしは知らない。

たとえおまえがなんであれ、

ひかれ、ひかれ、小さな星よ！(大島かおり訳)

(ハイムランドの子どもたちの歌)

注

- (1) Michael Ende: Momo. K. Thienemanns Verlag, 1973. 作中の作品ハイムランド・ローハ „Märchen-Roman“ を訳したものである。
- (2) Michael Ende: Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer. K. Thienemanns Verlag, 1960.
- (3) 「十〇年代のドイツ児童文学者と社会化の問題」(筆者)。東京女子大学比較文化研究所紀要 第四十三巻。
- (4) 同「ハイムランド」。
- (5) Philippa Pearce: Tom's Midnight Garden. Oxford University Press, 1958.
- (6) John Rowe Townsend: Written for Children. An Outline of English-language Children's Literature. Penguin Books, 1965, p. 247.
- (7) Edith Nesbit: The Story of the Amulet, 1905. Alison Uttley: A Traveller in Time, 1939. Mary Norton: Bonfires and Broomsticks, 1947. Lucy M. Boston: The Children of Green Knowe, 1954. 以下。
- (8) Tom's Midnight Garden by A. Philippa Pearce. Chosen for Children, The Library Association, 1977, p. 99.
- (9) Marcel Proust: A la Recherche du Temps perdu. Bibliothèque de la Pléiade, 1954, Tome III, p. 1031~1032.
- (10) Ibid., p. 1032.
- (11) J. R. Townsend: Written for Children. Penguin Books, 1965, p. 247.
- (12) Marcel Proust: A la Recherche du Temps perdu. Bibliothèque de la Pléiade, 1954, III, p. 871.
- (13) Jean Gebser: Ursprung und Gegenwart, Bd. II, Die Manifestationen der aperspektivischen Welt. Deutsche Verlags-Anstalt, 1953,

ハイムランド・ローハ「ハイム」

S. 187~, S. 347~.

- (14) Tom's Midnight Garden by A. Philippa Pearce. Chosen for Children, The Library Association, 1977, p. 98.
- (15) Rainer Maria Rilke: Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. Sämtliche Werke, Insel Verlag, 1966, Bd. VI, S. 865~870.
- (16) Ibid., S. 735.
- (17) An Nora Putzsch-Wydenbruck, am 11. August 1924. Rainer Maria Rilkes Briefe in 2 Bde., Bd. II, S. 452~453.
- (18) 「世間の花」のハイムランド・ローハが「ハイムランド」の中の「天の花園」 „Der himmlische Garten“ の中で描くアンデルセンが「貧乏母親の物語」の中で描いた「世間の花」のハイムランドと重なる部分がある。
- (19) Novalis: Heinrich von Ofterdingen. Gesammelte Werke, Bühl-Verlag, 1945, Bd. I, S. 268.
- (20) Novalis: Blütenstaub. Gesammelte Werke, Bühl-Verlag, 1945, Bd. II, S. 13.
- (21) Astrid Lindgren: Pippi Langstrumpf, 1944.
- (22) Antoine de Saint-Exupéry: Le petit Prince. Librairie Gallimard, 1946.
- (23) Paul Hazard: Les Livres, les Enfants et les Hommes. Boivin, 1949, p. 162.
- (24) 「あふたが、あふたのバラの花をとりもたないやうに思っているのだね、そのバラの花のためにはあふたがうたがたからだよ。」(傍点筆者)の原文は次の通りである。

“C'est le temps que tu as perdu pour la rose qui fait ta rose si importante.” (Antoine de Saint-Exupéry, Œuvres, Bibliothèque de la Pléiade, p. 474.)

〔短期大学部助教授(比較文学)一九七九—八二年度総合研究員〕